

秋風記

太宰治

青空文庫

立ちつくし、

ものを思へば、

ものみなの物語めき、

(生田長江)

あの、私は、どんな小説を書いたらいいのだろう。私は、物語の洪水の中に住んでいる。役者になれば、よかった。私は、私の寝顔をさえスケッチできる。

私が死んでも、私の死顔を、きれいにお化粧してくれる、かなしいひとだって在るのだ。Kが、それをしてくれるであろう。

Kは、私より二つ年上なのだから、ことし三十二歳の女性である。

Kを、語ろうか。

Kは、私とは別段、血のつながりは無いのだけれど、それでも小さいころから私の家と往復して、家族同様になっている。そうして、いまはKも、私と同じ様に、「生れて来な

ければよかった。」と思つてゐる。生れて、十年たたぬうちに、この世の、いちばん美しいものを見てしまった。いつ死んでも、悔いがない。けれども、Kは、生きている。子供のために生きている。それから、私のために、生きている。

「K、僕を、憎いだらうね。」

「ああ、」Kは、厳肅にうなづく。「死んでくれたらいいと思うことさえあるの。」

ずいぶん、たくさんの身内が死んだ。いちばん上の姉は、二十六で死んだ。父は、五十三で死んだ。末の弟は、十六で死んだ。三ばん目の兄は、二十七で死んだ。ことしになつて、そのすぐ次の姉が、三十四で死んだ。甥おいは、二十五で、従弟いとこは、二十一で、どちらも私になつてゐたのに、やはり、ことし、相ついで死んだ。

どうしても、死ななければならぬわけがあるのなら、打ち明けておくれ、私には、何もできないだらうけれど、二人で語ろう。一日に、一語ずつでもよい。ひとつきかかつて、ふたつきかかつてよい。私と一緒に、遊んでいておくれ。それでも、なお生きてゆくあてがつかなくなつたときには、いいえ、そのときになつても、君ひとりで死んではいけない。そのときには、私たち、みんな一緒に死のう。残されたものが、可哀そうです。君よ、知るや、あきらめの民の愛情の深さを。

Kは、そうして、生きている。

ことしの晩秋、私は、格子縞こうしじまの鳥打帽をまぶかにかぶって、Kを訪れた。口笛を三度すると、Kは、裏木戸をそつとあけて、出て来る。

「いくら？」

「お金じゃない。」

Kは、私の顔を覗のぞきこむ。

「死にたくなった？」

「うん。」

Kは、かるく下唇を噛む。

「いまごろになると、毎年きまって、いけなくなるらしいのね。寒さが、こたえるのかしら。羽織はおりないの？ おや、おや、素足で。」

「こういうのが、粋いきなんだそうだ。」

「誰が、そう教えたの？」

私は溜息ためいきをついて、「誰も教えやしない。」

Kも小さい溜息をつく。

「誰か、いいひとがないものかねえ。」

私は、微笑する。

「Kとふたりで、旅行したいのだけれど。」

Kは、まじめに、うなづく。

わかつているのだ。みんな、みんな、わかつているのだ。Kは、私を連れて旅に出る。
この子を死なせてはならない。

その日の真夜中、ふたり、汽車に乗った。汽車が動き出して、Kも、私も、やっと、な
んだか、ほっとする。

「小説は？」

「書けない。」

まっくら闇の汽車の音は、トラタタ、トラタタ、トラタタタ。

「たばこ、のむ？」

Kは、三種類の外国煙草を、ハンドバッグから、つぎつぎ取り出す。

いつか、私は、こんな小説を書いたことがある。死のうと思った主人公が、いまわの際

に、一本の、かおりの高い外国煙草を吸ってみた、そのほのかなよろこびのために、死ぬること、思いとどまった、そんな小説を書いたことがある。Kは、それを知っている。

私は、顔をあからめた。それでも、きぎに、とりすまして、その三種類の外国煙草を、えこひいき依怙鼻^{えこひいき}真なく、一本ずつ、順々に吸ってみる。

横浜で、Kは、サンドイッチを買い求める。

「たべない？」

Kは、わざと下品に、自分でもりもり食べて見せる。

私も、落ちついて一きれ頬^ほばる。塩からかった。

「ひとことでも、ものを言えば、それだけ、みんなを苦しめるような気がして、むだに、くるしめるような気がして、いつそ、だまって微笑^{ほほえ}んで居れば、いいのだろうけれど、僕は作家なのだから、何か、ものを言わなければ暮^ほしてゆけない作家なのだから、ずいぶん骨が折れます。僕には、花一輪をさえ、ほどよく愛することができません。ほのかな匂いを愛^めずるだけでは、とても、がまんができません。突風の如く手折^{たお}って、掌にのせて、花びらむしって、それから、もみくちやにして、たまらなくなつて泣いて、唇のあいだに押し込んで、ぐしゃぐしゃに噛んで、吐き出して、下駄でもって踏み^ふみにじって、それから、

自分で自分をもて余します。自分を殺したく思います。僕は、人間でないのかも知れない。僕はこのごろ、ほんとうに、そう思うよ。僕は、あの、サタンではないのか。殺生石。毒きのこ。まさか、吉田御殿とは言わない。だって、僕は、男だもの。」

「どうだか。」Kは、きつい顔をする。

「Kは、僕を憎んでいる。僕の八方美人^{はっほうびじん}を憎んでいる。ああ、わかった。Kは、僕の強さを信じている。僕の才を買いかぶっている。そうして、僕の努力を、ひとしれぬ馬鹿な努力を、ごぞんじないのだ。らっきょうの皮を、むいてむいて、しんまでむいて、何もない。きつとある、何かある、それを信じて、また、べつの、らっきょうの皮を、むいて、むいて、何もなし、この猿のかなしみ、わかる？ ゆきあたりばったりの万人を、ことごとく愛しているということは、誰をも、愛していないということだ。」

Kは、私の袖^{そで}をひく。私の声は、人並はずれて高いのである。

私は、笑いながら、「ここにも、僕の宿命がある。」

湯河原^{ゆがわら}。下車。

「何もない、ということ、嘘だわ。」Kは宿のどてらに着換えながら、そう言った。「この、どてらの柄は、この青い縞は、こんなに美しいじゃないの？」

「ああ、」私は、疲れていた。「さっきの、らっきょうの話？」

「ええ、」Kは、着換えて、私のすぐ傍にひっそり坐った。「あなたは、現在を信じない。いまの、この、刹那を信じていることができる？」

Kは少女のように無心に笑って、私の顔を覗き込む。

「刹那は、誰の罪でもない。誰の責任でもない。それは判っている。」私は、旦那様のうにちゃんと座蒲団に坐って、腕組みしている。「けれども、それは、僕にとって、いのちのよろこびにはならない。死ぬる刹那の純粹だけは、信じられる。けれども、この世のよろこびの刹那は、——」

「あとの責任が、こわいの？」

Kは、小さくはしゃいでいる。

「どうにも、あとしまつができない。花火は一瞬でも、肉体は、死にもせず、ぶざまにいつまでも残っているからね。美しい極光を見た刹那に、肉体も、ともに燃えてあとかたもなく焼失してしまえば、たすかるのだが、そうもいかない。」

「意気地がないのね。」

「ああ、もう、言葉は、いやだ。なんとでも言える。刹那のことは、刹那主義者に問え、だ。手をとって教えてくれる。みんな自分の料理法のご自慢だ。人生への味附けだ。思い出に生きるか、いまのこの刹那に身をゆだねるか、それとも、——将来の希望とやらに生きるか、案外、そんなところから人間の馬鹿と伶俐^{りこう}のちがいが、できて来るのかも知れない。」

「あなたは、ばかなの？」

「およしよ、K。ばかも伶俐もない。僕たちは、もっとわるい。」

「教えて！」

「ブルジョア。」

それも、おちぶれたブルジョア。罪の思い出だけに生きている。ふたり、たいへん興ざめして、そそくさと立ちあがり、手拭い持って、階下の大浴場へ降りて行く。

過去も、明日も、語るまい。ただ、このひとときを、情にみちたひとときを、と沈黙のうちに固く誓約して、私も、Kも旅に出た。家庭の事情を語ってはならぬ。身のくるしさを語ってはならぬ。明日の恐怖を語ってはならぬ。人の思惑を語ってはならぬ。きのうの

恥を語ってはならぬ。ただ、このひととき、せめて、このひとときのみ、静謐せいひつであれ、と念じながら、ふたり、ひっそりからだを洗った。

「K、僕のおなかのここんとこに、傷跡があるだろう？　これ、盲腸の傷だよ。」

Kは、母のように、やさしく笑う。

「Kの脚だって長いけれど、僕の脚、ほら、ずいぶん長いだろう？　できあいのズボンじゃ、だめなんだ。何かにつけて不便な男さ。」

Kは、暗闇の窓を見つめる。

「ねえ、よい悪事って言葉、ないかしら。」

「よい悪事。」私も、うつとり呟つぶやいてみる。

「雨？」Kは、ふと、きき耳を立てる。

「谷川だ。すぐ、この下を流れている。朝になってみると、この浴場の窓いっぱい紅葉だ。すぐ鼻のさきに、おや、と思うほど高い山が立っている。」

「ときどき来るの？」

「いいえ。いちど。」

「死にに。」

「そうだ。」

「そのとき遊んだ？」

「遊ばない。」

「今夜は？」Kは、すましている。

私は笑う。「なあんだ、それがKの、よい悪事か。なあんだ。僕はまた、——」

「なに。」

私は決意して、「僕と、一緒に死ぬのかと思った。」

「ああ、」こんどは、Kが笑った。「わるい善行って言葉も、あるわよ。」

浴場のながい階段を、一段、一段、ゆっくりゆっくり上る毎に、よい悪事、わるい善行、よい悪事、わるい善行、よい悪事、わるい善行、……。

芸者をひとり、よんだ。

「私たち、ふたりで居ると、心中しそうで危いから、今夜は寝ないで番をして下さいな。死神が来たら、追っ払うんですよ。」Kがまじめにそう言っていると、

「承知いたしました。まさかのときには、三人心中というでもあります。」と答えた。

観世かんぜ縫に火を点じて、その火の消えないうちに、命じられたものの名を言って隣の人

に手渡す、あの遊戯をはじめた。ちつとも役に立たないもの。はい。

「片方割れた下駄。」

「歩かない馬。」

「破れた三味線。」

「写らない写真機。」

「つかない電球。」

「飛ばない飛行機。」

「それから、——」

「早く、早く。」

「真実。」

「え？」

「真実。」

「野^{やほ}暮だなあ。じゃあ、忍耐。」

「むずかしいのねえ、私は、苦労。」

「向上心。」

「デカダン。」

「おとといのお天気。」

「私。」 Kである。

「僕。」

「じゃあ、私も、——私。」 火が消えた。芸者のまけである。

「だって、むずかしいんだもの。」 芸者は、素直にくつろいでいた。

「K、冗談だろうね。真実も、向上心も、Kご自身も、役に立たないなんて、冗談だろうね。僕みたいな男だつても、生きて居る限りは、なんとかして、立派に生きていたいとあがいているのだ。Kは、ばかだ。」

「おかえり。」 Kも、きつとなつた。「あなたのまじめさを、あなたのまじめな苦しさを、そんなに皆に見せびらかしたいの?」

芸者の美しさが、よくなかつた。

「かえる。東京へかえる。お金くれ。かえる。」 私は立ちあがって、どてらを脱いだ。

Kは、私の顔を見上げたまま、泣いている。かすかに笑顔を残したまま、泣いている。

私は、かえりたくなかつた。誰も、とめてはくれないのだ。えい、死のう、死のう。私

は、着物に着換えて足袋たびをはいた。

宿を出た。走った。

橋のうで立ちどまつて、下の白い谷川の流れを見つめた。自分を、ばかだと思った。ばかだ、ばかだ、と思った。

「ごめんなさい。」ひっそりKは、うしろに立っている。

「ひとを、ひとをいたわるのも、ほどほどにするがいい。」私は泣き出した。

宿へかえると、床が二つ敷かれていた。私は、ヴェロナアルを一服のんで、すぐに眠ったふりをした。しばらくして、Kは、そつと起きあがり、同じ薬を一服のんだ。

あくる日は、ひるすぎまで、床の中でうつらうつらしていた。Kはさきに起きて、廊下の雨戸をいちまいあけた。雨である。

私も起きて、Kと語らず、ひとりで浴場へ降りていった。

ゆうべのことは、ゆうべのこと。ゆうべのことは、ゆうべのこと。——無理矢理、自分に言いかせながら、ひろい湯槽ゆふねをかるく泳ぎまわった。

湯槽から這い出て、窓をひらき、うねうね曲つて流れている白い谷川を見おろした。

私の背中に、ひやと手を置く。裸身のKが立っている。

「せきれい鵲せきれい。」Kは、谷川の岸の岩に立ってうごいている小鳥を指さす。「せきれいは、ス

テツキに似ているなんて、いい加減の詩人ね。あの鵲せきれいは、もつときびしく、もつとけな
げで、どだい、人間なんてものを問題にしていけない。」

私も、それを思っていたのだ。

Kは、湯槽にからだを、滑りこませて、

「もみじ紅葉もみじって、派手な花なのね。」

「ゆうべは、——」私が言いよど澀むと、

「ねむれた？」無心にたずねるKの眼は、湖水のように澄んでいる。

私は、ざぶんと湯槽に飛び込み、「Kが生きているうち、僕は死なない、ね。」

「ブルジョアって、わるいもののなの？」

「わるいやつだ、と僕は思う。わびしさも、苦悩も、感謝も、みんな趣味だ。ひとりよがりだ。プライドだけで生きている。」

「ひとの噂だけを気にしていて、」Kは、すらと湯槽から出て、さっさとからだを拭きながら、「そこに自分の肉体が在ると思っっているのね。」

「富めるものの天国に入るは、——」そう冗談に言いかけて、ぴしと鞭打たれた。^{むち}「人なみの仕合せは、むずかしいらしいよ。」

Kはサロンで紅茶を飲んでいた。

雨のせいかな、サロンは賑^{にぎわ}っていた。

「この旅行が、無事にすむと、」私は、Kとならんで、山に見える窓際の椅子に腰をおろした。「僕は、Kに何か贈り物しようか。」

「十字架。」そう呟くKの頸^{くび}は、細く、かよわく見えた。

「ああ、ミルク。」女中にそう言いつけてから、「K、やっぱり怒っているね。ゆうべ、かえるなんて乱暴なこと言ったの、あれ、芝居だよ。僕、——舞台中毒かも知れない。一日にいちど、何か、こう、きぎに気取ってみなければ、気がすまないのだ。生きて行けないのだ。いまだって、ここにこうやって坐^まつていても、死ぬほど気取っているつもりなのだよ。」

「恋は？」

「自分の足袋のやぶれが気にかかって、それで、失恋してしまった晩もある。」

「ねえ、私の顔、どう？」Kは、まともに顔をちか寄せる。

「どう、つて。」私は顔をしかめる。

「きれい？」よそのひとのような感じで、「わかく見える？」

私は、殴りつけたと思う。

「K、そんなに、さびしいのか。K、おぼえて置くがいい。Kは、良妻賢母で、それから、僕は不良少年、ひとの屑だ。」

「あなただけ、」言いかけたとき、女中がミルクを持って来る。「あ、どうも。」

「くるしむことは、自由だ。」私は、熱いミルクを啜りながら、「よろこぶことも、そのひとの自由だ。」

「ところが、私、自由じゃない。両方とも。」

私は深い溜息をつく。

「K、うしろに五、六人、男がいるね。どれがいい？」

つとめ人らしい若いのが四人、麻雀マージャンをしている。ウイスキーソーダを飲みながら新聞を読んでいる中年の男が、二人。

「まんなかのが。」Kは、山々の面を拭いてあるいている霧の流れを眺めながら、ゆっく

り呟く。

ふりむいて、みると、いつのまにか、いまひとりの青年が、サロンのまんなかに立っていて、ふところ手のまま、入口の右隅にある菊の生花を見つめている。

「菊は、むずかしいからねえ。」Kは、生花の、なんとか流の、いい地位にいた。

「ああ、古い、古い。あいつの横顔、晶助兄さんにそっくりじゃないか。ハムレット。」その兄は、二十七で死んだ。彫刻をよくしていた。

「だって、私は男のひと、他にそんなに知らないのだから。」Kは、恥ずかしそうにしていた。

号外。

女中は、みなに一枚一枚くばって歩いた。——事変以来八十九日目。上^{シャンハイ}海包圍全く成る。敵軍潰^{かいらん}乱全線に総退却。

Kは号外をちらと見て、

「あなたは？」

「丙種。」

「私は甲種なのね。」Kは、びつくりする程、大きい声で、笑い出した。「私は、山を見

ていたのじゃなくつてよ。ほら、この、眼のまえの雨だれの形を見ていたの。みんな、それぞれ個性があるのよ。もったいぶつて、ぼたんと落ちるのもあるし、せつかに、痩^やせたまま落ちるのもあるし、気取つて、ぴちやんと高い音たてて落ちるのもあるし、つまらなそうに、ふわつと風まかせに落ちるのもあるし、――」

Kも、私も、くたくたに疲れていた。その日湯河原を発つて熱海についたころには、熱海のまちは夕靄^{ゆうもや}につつまれ、家家の灯は、ぼつと、ともつて、心もとなく思われた。

宿について、夕食までに散歩しようと、宿の番傘を二つ借りて、海辺に出て見た。雨天のしたの海は、だるそうにうねつて、冷いしぶきをあげて散っていた。ぶあいそな、なげやりの感じであつた。

ふりかえつて、まちを見ると、ただ、ぱらぱらと灯が散在していて、

「こどものじぶん、」Kは立ちどまつて、話かける。「絵葉書に針でもつてぷつぷつ穴をあけて、ランプの光に透かしてみると、その絵葉書の洋館や森や軍艦に、きれいなイルミネーションがついて、――あれを思い出さない？」

「僕は、こんなけしき、」私は、わざと感覚の鈍^{にぶ}い言いかたをする。「幻燈で見たことが

ある。みんなぼつとかすんで。」

海岸通りを、そろそろ歩いた。「寒いね。お湯にはいつてから、出て来ればよかった。」

「私たち、もうなんにも欲しいものがないのね。」

「ああ、みんなお父さんからもらってしまった。」

「あなたの死にたいという気持、——」Kは、しゃがんで素足の泥を拭きながら、「わかつている。」

「僕たち、」私は十二、三歳の少年の様に甘える。「どうして独力で生活できないのだろうね。さかなやをやったって、いいんだ。」

「誰も、やらせてくれないよ。みんな、意地わるいほど、私たちを大切にしてくれるからね。」

「そうなんだよ、K。僕だって、ずいぶん下品なことをしたいのだけれど、みんな笑って、——」魚釣る人のすがたが、眼にとまった。「いつそ、一生、釣りでもして、阿呆あほうみたい暮そうかな。」

「だめさ。魚の心が、わかりすぎて。」

ふたり、笑った。

「たいてい、わかるだろう？　僕がサタンだということ。僕に愛された人は、みんな、だいなしになってしまうということ。」

「私には、そう思えないの。誰もおまえを憎んでいない。偽悪趣味。」

「甘い？」

「ああ、このお宮の石碑みたい。」路傍に、金色夜叉の石碑が立っている。

「僕、いちばん単純なことを言おうか。K、まじめな話だよ。いいかい？　僕を、――」

「よして！　わかつているわよ。」

「ほんとう？」

「私は、なんでも知っている。私は、自分がおめかけの子だってことも知っています。」

「K。僕たち、――」

「あ、危い。」Kは私のからだをかばった。

ばりばりと音たててKの傘が、バスの車輪にひつたくられて、つづいてKのからだ、水泳のダイヴィングのようにすらっと白く一直線に車輪の下に引きずりこまれ、くるくると花の車。

「とまれ！　とまれ！」

私は丸太棒でがんと脳天を殴られた思いで、激怒した。ようやくとまったバスの横腹を力まかせに蹴上げた。Kはバスの下で、雨にたたかれた桔梗ききようの花のように美しく伏していた。この女は、不仕合せな人だ。

「誰もさわるな！」

私は、気を失っているKを抱きあげ、声を放って泣いた。

ちかくの病院まで、Kを背負っていった。Kは小さい声で、いたい、いたい、と言って泣いていた。

Kは、病院に二日いて、駆けつけて来たうちの者たちと一緒に、自動車で、自宅へかえった。私は、ひとり、汽車でかえった。

Kの怪我けがはたいしたことないようだ。日に日に快方に向っている。

三日まえ、私は、用事があって新橋へ行き、かえりに銀座を歩いてみた。ふと或る店の飾り窓に、銀の十字架の在るのを見つけて、その店へはいり、銀の十字架ではなく、店の

棚の青銅の指輪を一箇、買い求めた。その夜、私のふところには、雑誌社からもらったばかりのお金が少しあったのである。その青銅の指輪には、黄色い石で水仙の花がひとつ飾りつけられていた。私は、それをKあてに送った。

Kは、そのおかえしとして、ことし三歳になるKの長女の写真を送って寄こした。私はけさ、その写真を見た。

青空文庫情報

底本：「太宰治全集2」ちくま文庫、筑摩書房

1988（昭和63）年9月27日第1刷発行

底本の親本：「筑摩全集類聚版太宰治全集」筑摩書房

1975（昭和50）年6月～1976（昭和51）年6月刊行

入力：柴田卓治

校正：小林繁雄

1999年9月17日公開

2005年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（<http://www.aozora.gr.jp/>）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。

秋風記

太宰治

2020年 7月17日 初版

奥 付

発行 青空文庫

URL <http://www.aozora.gr.jp/>

E-Mail info@aozora.gr.jp

作成 青空ヘルパー 赤鬼@BFSU

URL <http://aozora.xisang.top/>

BiliBili <https://space.bilibili.com/10060483>

Special Thanks

青空文庫 威沙

青空文庫を全デバイスで楽しめる青空ヘルパー <http://aohelp.club/>
※この本の作成には文庫本作成ツール『威沙』を使用しています。
<http://tokimi.sylphid.jp/>